

竊かに愚案を回らして、ほぼ古今を勘うるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、後学相統の疑惑あることを思うに、幸いに有縁の知識によらずは、いかでか易行の一門に入ることを得んや。全く自見の覚悟をもって、他力の宗旨を乱ること莫れ。よって、故親鸞聖人御物語の趣、耳の底に留まるところ、いささかこれをしるす。ひとえに同心行者の不審を散ぜんがためなりと云々  
(歎異抄前序・原漢文)

第17組 幸福寺住職

楠 信生

text by Shinshou Kusunoki

## 前序 「浄土本願の仏道」

### 竊かに愚案を回らして

親鸞聖人は『教行信証』「総序」の文と「後序」の文で「竊かに以みれば」という言葉で書き始めておられますが、『歎異抄』の編者唯円もまた「竊かに」をもって序を述べ始めています。ただ『歎異抄』の場合は、宗祖の「以みれば」という表現とは異なって「愚案を回らして」と更に自分の考えについて謙譲の語を用いております。

その心は、単に控えめな態度というものではありません。それは、仏法に対する謙譲を表しているのです。人間の知恵でははかり知ることのできない本願と仏恩の深遠を信知する態度なのです。この仏法の深さを真に私共に知らせてくださるのが「有縁の知識」であります。

### 有縁の知識

私事になりますが、私が二十代で初めて教区主催の研修会に参加した時のことです。そのときの講師は、蓬茨祖運先生でした。私に感話があたった折り、ちょうどその頃、道元禅師に関心を持っていたので『正法眼蔵』の一節を出して話しました。ところがその後の講義の中で「教相が違います」の一言で片付けられました。当時、教相ということは、知識としては知っていました。ところが自分で味わい深いと思っていたことが、その一言で批判的に言い当てられたのです。気恥ずかしさだけを感じたものでした。実際には『正法眼蔵』の言葉の内容より私が好みで学んでいる姿勢を批判されたのだと思いますが、年を重ねるごとに大切なことを教えていただいたと思われてきます。自分の考えや学び方が教相から批判されたことは、迷路の中で真宗の要から遠く離れたところをうろろうしていたことを教えていただいたわけです。もちろん、当時の私がそこまで考えが及ばなかったことはいうまでもありません。

難行易行の二道判、聖道浄土の二門という教相の言葉を知っていても、自分にとっての教えとして聞いていなかった証しであります。

また、有縁の法という言葉がありますが、有縁の法とは、自分が関心を持っている教えが有縁の法というよりは、むしろ私を真に利益する(成仏せしめる)教えこそ有縁の法と呼ばれるものであります。そしてそのような有縁の法に導いてくださるからこそ有縁の知識

というのです。その意味では、有縁の知識は、自分の好みで学んでいるような在りかたを正して下さるということがあるのでしょう。

### 易行の一門

有縁の知識によって教えられることは、念仏成仏の一道であります。これが、易行の一門と呼ばれる内容であります。

易行ということについては、次のように説かれております。

「信方便の易行をもって疾く阿惟越致に至る者あり」

（「易行品」真宗聖典一六五頁）

易行道は、いわく、ただ信仏の因縁をもって浄土に生まれんと願ず。仏願力に乗じて、すなわちかの清浄の土に往生を得しむ」

（『浄土論註』真宗聖典一六八頁）

易行 浄土本願真実の教、『大無量寿経』等なり

（『愚禿鈔』真宗聖典四二四頁）

信方便の易行・信仏の因縁ということが教えるところは、易行がただ行じ易いというだけのことではなく、それが仏の大願業力による、願力自然によるから、易行であるということです。宗祖が『愚禿鈔』で「真実の教」というだけでなく「浄土本願真実の教」と述べておられるのもそのことでありましょう。

有縁の知識も易行の一門ということも、浄土本願の仏道として伝承されていることでもあります。